

鹿児島県総合教育センター
令和元年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

伝えたい！知りたい！
コミュニケーションを楽しむ児童の育成
ー外国語を話したくなる学習指導の工夫を通してー

鹿児島市立西伊敷小学校
教諭 田代 祐二

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	児童の実態	2
(1)	実態調査の概要	2
(2)	結果と考察	2
2	研究主題についての基本的な考え方	3
(1)	「コミュニケーションを楽しむ児童」について	3
(2)	「外国語を話したくなる学習指導の工夫」について	3
3	研究の視点	3
(1)	【視点1】自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための工夫	4
(2)	【視点2】達成感や充実感を味わわせるための工夫	6
(3)	【視点3】相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための工夫	7
4	検証授業Ⅰの実際と考察	10
(1)	検証授業Ⅰの概要	10
(2)	検証授業Ⅰにおける視点と手立て	10
(3)	検証授業Ⅰの指導計画	11
(4)	検証授業Ⅰの実際	12
(5)	検証授業Ⅰ後の考察	16
5	検証授業Ⅱの実際と考察	17
(1)	検証授業Ⅱの概要	17
(2)	検証授業Ⅱにおける視点と手立て	17
(3)	検証授業Ⅱの指導計画	17
(4)	検証授業Ⅱの実際	19
(5)	検証授業Ⅱ後の考察	23
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	24
2	今後の課題	24

引用・参考文献

I 研究主題設定の理由

グローバル化が急速に進展する中で、外国語を使ったコミュニケーションは、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。また、平成28年12月の中央教育審議会答申においては、児童生徒が予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの能力を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが求められている。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編」（以下、学習指導要領）では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育成することが目標として設定されている。そのため、外国語教育においては、児童がこれまでに慣れ親しんできた外国語を駆使しながら、様々な相手と互いの考えや気持ちを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することが重要となる。そして、児童が考えや気持ちを伝え合う活動を通して、他者理解を深めたり、自分の思いを伝えたりして、外国語で伝え合えた達成感や充実感を味わうことができるようにする必要があると考える。

これまで本校では、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ってきた。その中で、歌やチャンツ、インタビュー活動等に対して楽しみながら取り組む児童の姿が見られるようになってきた。しかし、児童の実態調査から、児童が外国語活動で感じている楽しさは、「外国語を使ったゲーム活動」に対してであり、外国語を用いたコミュニケーションではないことが分かった。

その要因として、伝え合う活動におけるやり取りの表現を教師が定型化してしまい、機械的なやり取りになっていることが挙げられる。これにより、児童は覚えた表現を伝えることだけに精一杯になってしまっていると考えられる。コミュニケーションは相手があって成り立つものであり、目の前にいる相手の反応を確かめたり、反応を感じたりしながら、言葉による伝え合いを体験させていく必要がある。しかし、伝え合う表現が限定されているため、児童は相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合ったり、伝えたいことを十分に伝えたりすることができず、外国語でコミュニケーションを図ることの楽しさや大切さを感じることができていないと考えられる。また、児童が間違いや失敗を恐れずに外国語を話すことができるようにするための学級の雰囲気づくりや、単元終末の言語活動につながる段階的な学習活動の設定が不十分であることも要因として考えられる。

そこで、本研究では、児童が主体的にコミュニケーションを図るための手立ての在り方を明らかにし、児童が外国語を話したくなる学習指導を工夫する。それにより、児童が外国語によるコミュニケーションへの興味や関心を高めるとともに、相手の立場に立って互いの考えや気持ちを伝え合おうとする意欲を高めることができ、外国語を用いてコミュニケーションを楽しむ児童を育成することができるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

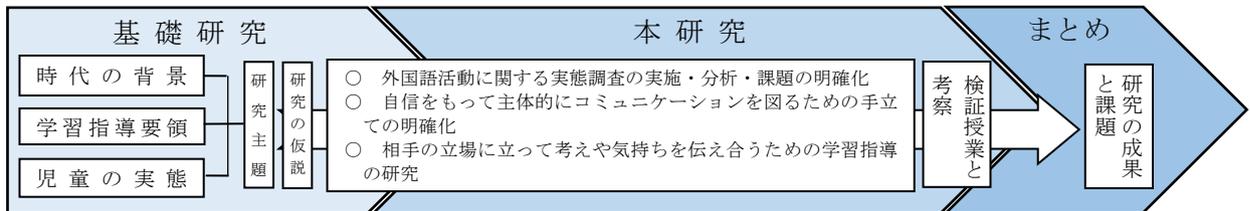
1 研究のねらい

- (1) 児童の実態調査を分析し、実態を把握するとともに、指導上の課題を明らかにする。
- (2) 児童が自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための手立ての在り方を明らかにする。
- (3) 児童同士が相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための学習指導の工夫を研究する。
- (4) 検証授業を行い、本研究の成果と課題を明らかにする。

2 研究の仮説

小学校外国語教育において、児童が自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための手立ての在り方を明らかにし、児童に達成感や充実感を味わわせながら、児童同士が相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための学習指導の工夫を行えば、外国語を用いてコミュニケーションを楽しむ児童を育成することができるのではないかと。

3 研究の計画



III 研究の実際

1 児童の実態

(1) 実態調査の概要

- ア 対象 鹿児島市立西伊敷小学校第6学年56人
- イ 実施日 令和元年5月28日(火)
- ウ 方法 質問紙法
- エ 内容 外国語活動に対する関心・意欲

(2) 結果と考察

「外国語活動の学習は楽しいですか。」という問いに対して、9割以上の児童が肯定的な回答をした(図1)。しかし、楽しいと思う活動についての質問に対して、約8割の児童が「ゲーム」を選択した一方で、「外国語を使ったやり取り」を選択した児童は4割以下であった(図2)。理由として、「恥ずかしい。自信がない。外国語での伝え方が分からない。」と回答している。

また、外国語を使ったやり取りに関する調査から、「相手の考えや気持ちをもっと知りたい。」と感じている児童が8割以上であるのに対して、「自分の考えや気持ちを伝えたい。(活動前の意欲)」や「自分の考えや気持ちを伝えようとしている。(活動中の積極性)」の質問に対して、肯定的な回答が7割以下であることが分かった(図3)。

この結果を踏まえ、児童が自信をもって主体的にコミュニケーションを図ることができるように、外国語を用いたやり取りに対する意欲を高めさせたり、考えや気持ちを伝え合うために必要な表現方法を身に付けさせたりするための手立ての工夫が必要であると考えます。

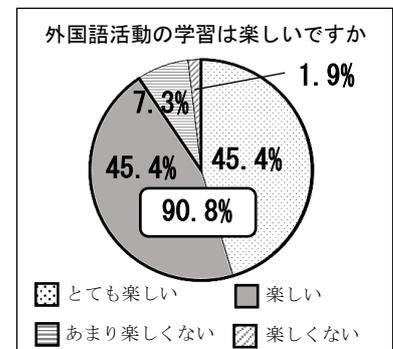


図1 外国語活動に関する意識調査①

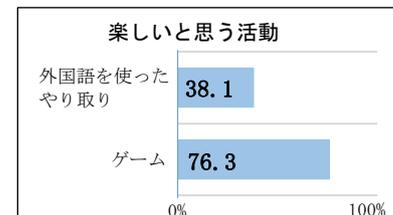


図2 外国語活動に関する意識調査②

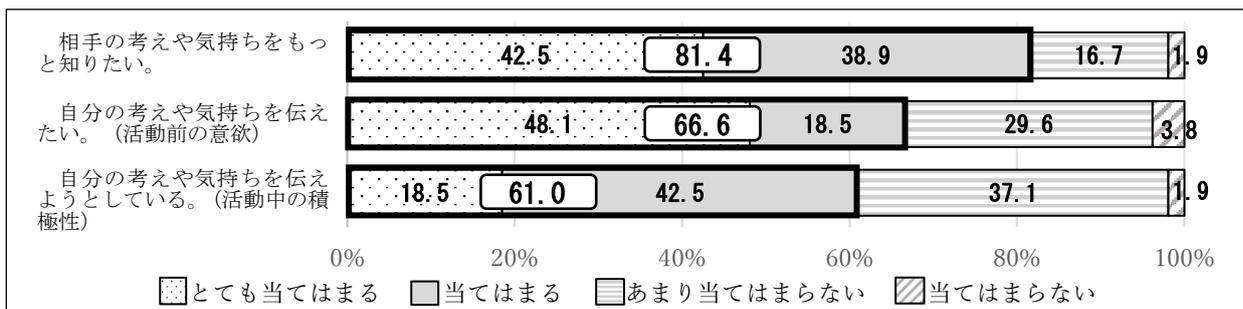


図3 外国語活動に関する意識調査③

2 研究主題についての基本的な考え方

(1) 「コミュニケーションを楽しむ児童」について

コミュニケーションとは、人と人が言葉だけでなく、表情や身振りなどの非言語的要素を交えて考えや気持ちを伝え、理解したり情報を交換したりするなど、話し手と聞き手の双方向でやり取りを行うことである。コミュニケーションを行う中で、話し手は考えや気持ちなどを発信し、聞き手はそれを受信する。コミュニケーションが円滑に行われることによって、意思の疎通が行われ、互いに理解し合えるようになり、コミュニケーションを楽しむことができると考える。

本研究における、「コミュニケーションを楽しむ」とは、「伝えたい」、「知りたい」という思いをもって、外国語で考えや気持ちを伝え合い、共感したり認め合ったりして達成感や充実感を味わうことである。学習指導要領では、コミュニケーションを図る上で、「聞き手の理解の状況を確認しながら話しているか、相手の発話に反応しながら聞き続けようとする態度を示しているかなどの相手への配慮が求められる。」と示されている。また、コミュニケーションの楽しさを体験させるために、「言葉を使って伝え合う体験を通して、相手に対する理解を深めたり、自分の思いを伝えたりして、英語で伝え合えた満足感や達成感を味わうことができるようにすることが大切である。」と示されている。そのため、「コミュニケーションを楽しむ児童」を育成するためには、定型化された表現だけを使った機械的なやり取りではなく、児童同士が「相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合う」ことが重要であると考え。また、相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うためには、まず、児童が考えや気持ちを「伝えたい」、「知りたい」という思いをもつことが大切である。

(2) 「外国語を話したくなる学習指導の工夫」について

相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うためには、伝える相手が誰なのか、相手に自分の考えや気持ちが伝わっているのかを意識し、既存の知識を活用して、相手分かるように工夫して伝えることが重要である。また、相手の発話を注意深く聞いて、相手の思いを理解しようしたり、受容しながら聞いたりすることも大切である。しかし、知っている語句や表現が限られている児童にとって、考えや気持ちを十分に伝え合うことが難しいことも予想される。さらに、外国語を使ったやり取りに対して、「外国語での伝え方が分からない。」と感じている児童の実態から、考えや気持ちを伝え合う以前に、児童が外国語を話したくなる状況にないことが分かった。これらを踏まえ、児童が自信をもって外国語を話したくなるための学習指導の工夫が必要であると考えた。

本研究において、「外国語を話したくなる学習指導の工夫」とは、児童の方略的能力を高めるための指導の工夫のことである。この方略的能力とは、語彙や文法等の知識の不足を補い、自分の考えや気持ちを理解してもらうために、知っている語句や表現への言い換えやジェスチャー、聞き返しや確認をして、何とかして相手とコミュニケーションを図ろうとする力のことである。具体的には、「教師のモデルを見せる場面」、「方略を考えさせる場面」、「活用させる場面」の三つの場面を設定し、方略的能力を高めるための指導を行う。

これにより、児童は話し手としての発信の方法や、聞き手としての受信の方法を身に付け、外国語を用いて考えや気持ちを伝え合うことができるようになると考える。

3 研究の視点

研究主題についての基本的な考え方を踏まえて、仮説を検証するための視点を三つ設定する。

【視点1】 自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための工夫

【視点2】 達成感や充実感を味わわせるための工夫

【視点3】 相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための工夫

視点に対する具体的な手立てや工夫については、次のとおりである。

(1) 【視点1】自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための工夫

ア 単元の授業設計の工夫

単元の授業設計の工夫とは、外国語教育における学習過程を基に、単元終末の言語活動に向けて段階的に学習活動を設定することである。

学習指導要領では、外国語教育における資質・能力の育成につながる外国語教育の学習過程が図4のように示されている。

①の段階では、単元の導入に単元終末の言語活動のモデルを児童に示すことで、児童にやり取りの目的や場面、状況等を理解させ、「自分たちもやってみたい」という意欲をもたせる。

②の段階では、児童が単元を通して目的意識をもちながら主体的に活動に取り組むことができるように、単元終末の言語活動に向けて必要な活動を児童と一緒に考え、単元の見通しをもたせる。また、単元全体を通して目標が達成されるように各時間の学習活動を一連のものとして設計し、授業を構成していく。その際、児童が単元終末の言語活動に向かって、ゴールをイメージしながら主体的に活動に取り組めるように、単元終末の言語活動に必要な学習活動を単元終末から逆向きに設計する。

③の段階では、児童がスモールステップによって成功体験を積みながら、自信をもって活動に取り組めるように、単元全体を通して、話す・聞く活動における慣れ親しみから定着まで段階的な学習活動を設定したり(図5)、言語活動を易しいものから段階的に取り入れたりして、十分に表現に慣れ親しませながらコミュニケーション活動に必要な表現を身に付けさせていく。また、1単位時間における言語活動の場面においても、「教師のモデル」、「教師と児童」、「児童同士」の順で段階的に取り組ませることで、児童が自信をもって外国語を話せるようにする。

④の段階では、単元最後の自己評価による振り返りを行い、単元を通じた自身の学びや変容を自覚させることによって、次の学びへの意欲を高めさせる。また、できるようになったことや友達のがよかったところなどを友達と伝え合うことによって、達成感や充実感を味わわせる。

このことによって、単元全体を通して一つ一つの活動がつながりのあるものとなり、児童は単元終末の言語活動に向かって見通しをもって取り組むことができる。また、段階的に活動に取り組むことができるため、抵抗なく英語に慣れ親しむことができ、自信をもって主体的にコミュニケーションを図ることができるようになると思われる。

イ 伝え合う必然性のある場面の設定

伝え合う必然性のある場面の設定とは、身近で具体的な場面の中で、児童が「誰に」、「何のために」という、「相手意識」や「目的意識」をもって、質問したり答えたりすることができる言語活動を設定することである。

コミュニケーションは話し手と聞き手の相互のやり取りであり、「伝えたい」、「知りたい」

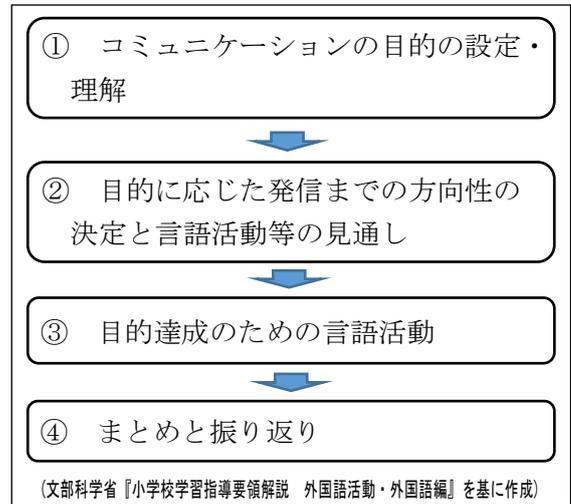


図4 外国語教育における学習過程

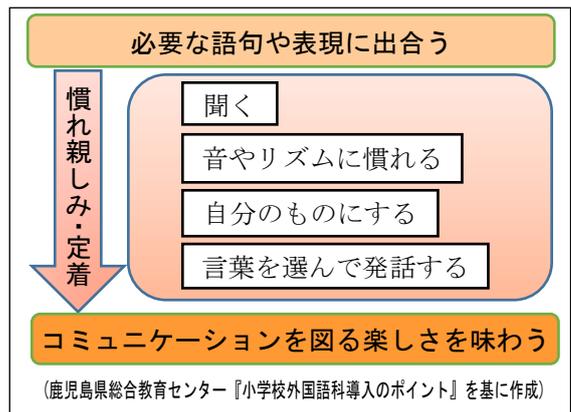


図5 単元などのまとまりを通じた慣れ親しみの過程

という思いがあって成り立つ。必然性のある場面を設定する際は、表現を聞いたり、話したりすることが自然であるような場面を児童の興味・関心・生活から選択し、それに基づいて活動を組むなど、児童が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような題材を取り上げる。

このことによって、児童が「伝えたい」、「知りたい」という思いをもち、主体的にコミュニケーションを図ることができるようになると考える。また、相手の思いを想像し、伝える内容や言葉、伝え方を考えながら、相手と意味のあるやり取りを行うことができ、互いの心を通わすことの大切さを児童に意識させるとともに、外国語を使ってコミュニケーションを図ることの楽しさを実感させることができると考える。

ウ Good English 5 ポイントの活用

「生徒指導提要」*1) (文部科学省, 2010 年) では、教科における生徒指導の推進の在り方として、「自分と違った友達の見方や考えなどを認めたり、学習に遅れがちな友達やつまづいている友達を支えたりすることは、児童生徒一人一人が互いの違いを認め合い、互いに支え合い、学び合う人間関係を醸成することにつながります。」と述べられている。また、長瀬*2) (1994) は、コミュニケーション活動を成立させるためには、教室での支持的風土づくりが必要であると述べている。支持的風土とは、仲間との間に自信と信頼が見られ、目標追究に対して自発性が尊重されることなどを特徴とする、協力的かつ創造的な成長集団の雰囲気を表すものであり、片岡*3) (1976) は、支持的風土づくりの視点として4つを挙げている (図6)。これらの考えを基に、児童の実態に合わせて図7の「Good English 5 ポイント (以下GE 5 ポイント)」を作成した。教師の声掛けだけでは児童にコミュニケーションのポイントを意識させ続けることが難しいと思われるため、外国語活動の学習における約束を提示し、毎時間声に出して確認させることによって、間違いや失敗を恐れず、協力し合いながら積極的に活動に取り組ませる。また、児童が外国語を用いたコミュニケーションの楽しさを実感できるよう、教師は児童が発する表現等が例え曖昧であっても積極的に英語を使おうとする態度を認め、賞賛し、支援を行っていく。

GE 5 ポイントの活用とは、間違いや失敗を恐れることのない豊かな人間関係や安心できる環境づくりのために、図7の外国語科の学習の時間における五つのポイントについて学級で共通理解を図り、授業の始めや活動前に確認させることである。

このことによって、教室に「間違えても大丈夫」という雰囲気をつくることができ、児童の外国語に対する不安を取り除き、失敗を恐れずに新しいものへ挑戦する気持ちを高めることができる。また、そういった経験を繰り返す中で、児童同士だけでなく、教師と児童との信頼関係も深まり、自信をもって主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考える。

- (1) 相手の発言や行いについて、相手の身になり、相手の立場に立ち、相手の考えをくみとる。
- (2) どんな考えもバカにしたり、笑ったりしない。「はみ出し」を大切に。
- (3) 相手の発言や行いに、どこかよいところはなにか、必死で探す。
- (4) 相手に注文するときは、相手を責めるのではなくて、率直に自分の考えを話す。

図6 支持的風土

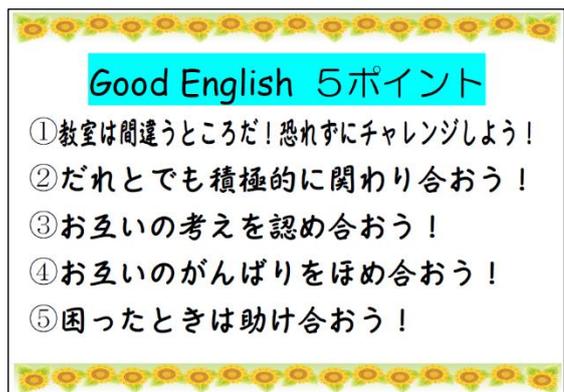


図7 Good English 5 ポイント

*1) 文部科学省『生徒指導提要』 2010年 教育図書

*2) 長瀬 荘一 『英語授業改革双書 N0.8 コミュニケーション能力を育てる英語の授業改造』 1994年 明治図書

*3) 片岡 徳雄 『個を生かす集団づくり』 1976年 黎明書房

(2) 【視点2】達成感や充実感を味わわせるための工夫

ア 振り返りカードの活用

振り返りカードの活用とは、振り返りカードを使って毎時間児童に自己評価をさせるだけでなく、振り返ったことを基に、自分ができたことや友達から学んだことなどを伝え合うことによって学級全体で分かち合うことである。

振り返りカードには、目標や感想の記述だけでなく、コミュニケーションを図る際に意識してほしい五つのポイントに関する欄を設け、毎時間授業の終わりに自己評価させる(図8)。また、単元を通した自己の変容や成長、課題を記述させることによって達成感や充実感を味わわせる。さらに、

友達から学んだことや考えや気持ちを伝え合う活動を通した感想を記述させることによって、学び合いのよさに気付かせるとともに、伝え合うことのよさや大切さに気付かせ

ることができる。また、外国語で伝え合えた満足感や達成感を味わわせるだけでなく、友達や自分のよさを再認識することで、他者理解や自尊感情などを高めさせることができると考える。さらに、児童の成長やよかったところを学級で分かち合い、互いに認め合うことによって、活動に対する児童の意欲を高め、自信をもって主体的にコミュニケーションを図ることにもつながっていくと考える。

イ フレンドマップの活用

フレンドマップの活用とは、ワークシートに図9のフレンドマップの欄を設け、やり取りをした友達を確認させながら活動に取り組ませることである。

学習指導要領では、「グローバル化が進展する中で、児童は多様な文化や価値観をもった人々と出会うことになる。そのような社会で生きていくためには、多様な考え

方を理解し、柔軟に対応することや、公正な判断力を養い、相手の状況や立場を共感的に理解できる心情を育てることが大切である。」と述べられている。これを踏まえ、様々な友達との伝え合いを通して、児童が多様な考えに触れることができるようにフレンドマップを活用させる。フレンドマップには学級全員の名前が書かれており、授業の終わりに、一緒に活動した友達の名前に印を付けさせる。やり取りをした友達の数を視覚的に捉えさせることによって、やり取りをした友達の数が増えていく達成感や充実感を味わわせる。また、活動前にフレンドマップを確認させ、まだ色の付いていない友達にも積極的に関わろうという意欲をもたせることができる。

このことによって、単元を通してより多くの友達との関わり合いを意識させることができ、

日	目標	
	5ポイント自己評価	視線()・はっきりと()・質問()・相づち()・助け合い()
	感想	
日	目標	
	5ポイント自己評価	視線()・はっきりと()・質問()・相づち()・助け合い()
	感想	
日	目標	
	5ポイント自己評価	視線()・はっきりと()・質問()・相づち()・助け合い()
	感想	
《単元全体の振り返り》		
	分かったこと、できるようになったこと、成長したと感じること	
	友達の意見で参考になったこと、学び合っよかったこと	
	英語で考えや気持ちをやり取りする活動を通して感じたこと	
	今後の学習でもっとできるようになりたいこと	

図8 振り返りカード

					
佐藤	鈴木	高橋	田中	伊藤	渡辺
山本	中村	小林	加藤	吉田	山田
佐々木	山口	松本	井上	木村	林
斎藤	清水	山崎	森	池田	橋本
阿部	石川	山下	中島	石井	(児童名は仮名)

図9 フレンドマップ

児童は、普段から関わりの多い友達だけでなく、あまり話をしたことのない友達ともやり取りをすることができるようになると思う。その中で、やり取りを通して友達の新たな一面に気付いたり、相手の考えや気持ちに共感したり認め合ったりすることを通して、人と関わることの楽しさを実感することができると思う。また、様々な友達と外国語を使って伝え合う経験を通して、外国語で伝え合えた達成感や充実感を味わわせることにつながっていくと思う。

(3) 【視点3】相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための工夫

ア 方略的能力を高めるための指導の工夫

外国語におけるコミュニケーション能力は、「文法能力」、「社会言語能力」、「談話能力」、「方略的能力」の四つの要素に整理されている(図10)。外国語によるコミュニケーションを円滑に行うためには、どうすれば相手により伝わるかを思考しながら、表現する内容や表現方法を自己選択し、尋ねたり答えたりする必要がある。また、児童にコミュニケーションを図ることの楽しさを味わわせるためには、事実や定型化された表現だけを使った機械的なやり取りに終わることがないように、相手の立場に立って互いの考えや気持ちを伝え合うことが大切である。しかし、知っている語句や表現が限られている児童にとって、互いの考えや気持ちを十分に伝え合うことが難しいことも予想される。そのため、自分が伝えたいことを相手にうまく伝えられなかったり、相手の話していることがよく理解できなかったりするときなどに、

能力	内容
文法能力	文や文章を作り出す能力
社会言語能力	発話の適切さを判断できる能力
談話能力	文レベルではなく文章の構成に関わる能力
方略的能力	語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力

(松川・大城『小学校外国語活動実践マニュアル』を基に作成)

図10 コミュニケーション能力の要素

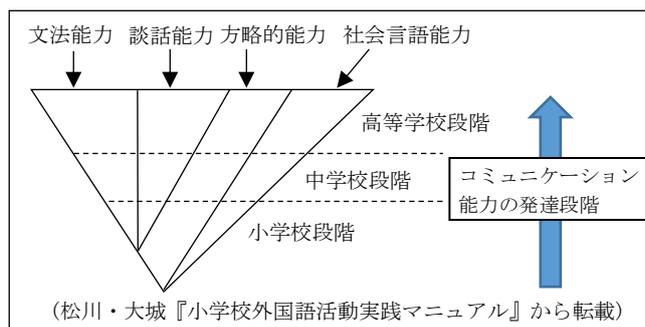


図11 各学校段階で育まれるコミュニケーション能力の要素

に、文法等の知識の不足を補い、聞き返しや確認、ジェスチャーを使ったり、相手にうまく伝えるための言い換えをしたりして何とかして相手とコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が重要であると思う。松川・大城^{*4)} (2008) は、コミュニケーション能力の四つの要素を、各学校段階において重点的に指導されることは何かという視点から捉え、図11のように図式化し、学ぶ語彙や表現が限られている小学校段階では、方略的能力が重要であると述べている。

本研究では、語彙や文法等の知識の不足を補い、相手の立場に立って何とかして相手とコミュニケーションを図ろうとする方法一つ一つのことを方略、これらを必要に応じて使うことができる力のことを方略的能力と捉えることとする。児童に方略的能力を身に付けさせるためには、実際のコミュニケーションの場面における方略を考えさせ、繰り返し活用させる必要があると思う。泉^{*5)} (2017) は、教師が方略を提示し、「学習者の中でデモンストレーションを行い、実際に使わせ、振り返らせるといった、実践とフィードバックを行い、メタ認知を高めること」が有効な方略の指導方法であると述べている。本研究では、泉(2017)の考えを基に、「教師のモデルを見せる場面」、「方略を考えさせる場面」、「活用させる場面」の三つの場面を設定し、方略的能力を高めるための指導を行う。

*4) 松川禮子・大城賢 『小学校外国語活動実践マニュアル』 2008年 旺文社

*5) 泉恵美子 『小学校英語における児童の方略的育成を目指した指導』2017年 京都教育大学教育実践研究紀要 第17号

(フ) 「教師のモデルを見せる場面」について

言語活動を行う上で想定されるコミュニケーションがうまくいかない場面を設定し、どのような方略を活用して対処すればよいのかをモデルとして教師が示す。その際、伝えたい英語表現が分からなくてもコミュニケーションを図ることができることを児童に気付かせるために、教師は児童がこれまで学習してきた語句や表現、ジェスチャーを使ってやり取りをする。

(ヘ) 「方略を考えさせる場面」について

教師のモデルを見て、どうしてコミュニケーションがうまくいったのか、どのような方略を活用していたのかを考えさせ、全体で共通理解を図る。その後、教師が模範で示した方略以外に活用できそうな方法がないか児童に考えさせ、円滑にコミュニケーションを図るために様々な表現や方法が活用できることに気付かせる。

(コ) 「活用させる場面」について

単元の中に方略を活用する場面を繰り返し設定し、考えた視点を実際に活用させる。児童が自信をもって方略を活用しながら伝えられるようにするために、まず個人で考えさせた後、ペアやグループで助言し合い、その後教師と児童、そして児童同士で伝え合う活動に取り組みさせる。繰り返し何度も経験させることによって、相手にうまく伝えられない場面や相手の言っていることが分からない場面で方略を活用しながら、何とかしてコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けさせていく。

このことによって、相手が分かるように工夫して伝えようとしたり、相手の発話を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、相手の考えや気持ちを受容しながら聞いたりすることができるようになることを考える。そして、方略を用いてコミュニケーションを図る中で、「相手の言っていることが分かった」、「自分の思いが伝わった」といった、実際に生きた英語を使うことの喜びと楽しさを味わわせることができると考える。

イ コミュニケーション5ポイントの活用

コミュニケーションとは、一方向ではなく、双方向で感情や情報についてのやり取りがある活動である。そのため、話し手は、聞き取りやすい声で言ったり動作を交えたりしながら聞き手を意識して分かりやすく伝え、聞き手はうなずくなどの反応を返して相手の考えや気持ちを受容しながら聞こうとする態度が重要である。そこで、児童が円滑にコミュニケーションを図ることができるようにするために、児童に意識してほしい五つのポイントを、児童の実態を踏まえて作成した(図12)。知っている語句や表現が限られている児童にとって、外国語を使ったやり取りに対して不安や抵抗をもつ児童がいることも考えられる。そのため、話し手と聞き手相互の協力が重要であり、協働的にやり取りをすることが重要であると考え。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(以下、ガイドブック)」(文部科学省、平成29年)では、「子供は自分よりも知識があり、豊富なスキルをもっている人のサポートを受けることにより、一人ではできないことができる。」と主張しているヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の概念の重要性について述べている。つまり、児童が他の児童とのやり取りの中で、自分一人では成し遂げることができなかったパフォーマンスをすることができるというのである。それを踏まえて、ポイントの一つとして「助け合い」を取り



図12 コミュニケーション5ポイント

入れた。これにより、教師だけでなく友達をサポートを受けながらやり取りをすることができるようになり、外国語を用いながらコミュニケーションを図ることができたという達成感や充実感を味わわせることができるようになる。また、「助け合い」を意識させることで、話し手が聞き手に手助けしてもらえただけでなく、聞き手側も話し手の内容を確認することができ、円滑なコミュニケーションにもつながると考える。

コミュニケーション5ポイントの活用とは、図12の共通理解を図ったコミュニケーションのポイントを教室に掲示して、やり取りの活動前後に児童に確認させることである。振り返りカードで五つのポイントに対する自己評価をさせることで、単元を通して意識の向上を図り、コミュニケーションのポイントを活用してやり取りすることのよさを実感させる。

このことによって、児童は、聞き手の理解の状況を確認しながら相手に伝わるように話したり、話し手の発話を注意深く聞いて考えや気持ちを理解しようとしたりする態度を身に付けることができるようになる。と考える。

ウ Small Talkの工夫

ガイドブックによると、Small Talkとは、既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ることや対話の続け方を指導することを目的に、2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。また、Small Talkは、児童にとって教師から良質な英語がインプットされる貴重な活動場面である。

単元の新出言語材料だけでなく、既習表現や対話を続けるための表現を活用することによって、児童は相手の立場に立って、より自分の考えや気持ちを伝え合うことができると考える。対話を続けるための表現とは、相手の話した言葉を繰り返して話し手が伝えたい内容を確認したり、相手の話したことに何らかの反応を示したりするなど、円滑にコミュニケーションを図るために欠かせない表現である。そこで、ガイドブックに示されている図13の対話を続けるための基本的な表現を基に、Small Talkを通して児童に既習表現や対話を続けるための表現を身に付けさせていく。

教師は、英語を使う模範として、児童の英語を話すことに対する興味や関心、意欲を高めさせたり、どのような表現を使ってどのように話せばよいのかを抵抗感をもたせないように伝えたりする必要があると考える。渡邊・酒井・塩川・浦野^{*6)} (2003) は、教師が児童に分かりやすい英語を話すための視点として、図14のMERRIER Approach (メリアー・アプローチ) を紹介している。渡邊他 (2003) は、継続的にMERRIER Approachを用いた指導を行うことによって、児童が英語を聞くことに抵抗を示さず理解するようになるという効果を指摘している。

そこで、Small Talkの工夫として、教師が児童に適切な表現を身に付けさせるためにMERRIER Approachを活用してSmall Talkを行う。Small Talkを行う際は、MERRIER Approachの七つの

対話の開始	対話の始めの挨拶 Hello./How are you?/ I'm good.How are you? など
繰り返し	相手の話した内容の中心となる語や文を繰り返して確かめること 相手：I went to Tokyo. 自分：(You went to) Tokyo. など
一言感想	相手の話した内容に対して自分の感想を簡単に述べ、内容を理解していることを伝えること That's good./That's nice./Really?/ That's sounds good. など
確かめ	相手の話した内容が聞き取れなかった場合に再度の発話を促すこと Pardon?/Once more,please. など
さらに質問	相手の話した内容についてより詳しく知るために、内容に関わる質問をすること 相手：I like fruits. 自分：What fruits do you like? など
対話の終了	対話の終わりの挨拶 Nice talking to you./You,too. など

(文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』から転載)

図13 対話を続けるための基本的な表現例

*6) 渡邊時夫 監修, 酒井英樹・塩川春彦・浦野研 著 『英語が使える日本人の育成—MERRIER Approachのすすめ』 2003年 三省堂

テクニックを活用しながら児童とやり取りをする。

このことによって、英語を使ったやり取りに対する不安を軽減させたり、教師の模範を参考にしながら既習表現や対話を続けるための表現を身に付けさせたりすることができ、言語活動の中でより円滑にコミュニケーションを図ることができるようになると思う。

テクニック	内容
Mime/Model	言語外情報を使うこと
Example	具体例を挙げること
Redundancy	別の視点で言い換えること
Repetition	重要なことは繰り返すこと
Interaction	児童に問いかけること
Expansion	児童の発言を正しく繰り返すこと
Reward	児童の発言や行動をほめること

(酒井『小学校の外国語活動 基本の「き」』を基に作成)

図 14 MERRIER Approach

4 検証授業 I の実際と考察

(1) 検証授業 I の概要

・ 単元名	What do you want to be? 夢宣言をしよう (Hi, friends! 2 Lesson6)
・ 実施学年	鹿児島市立西伊敷小学校第6学年 児童56人
・ 実施時期	令和元年6月27日(木)～7月17日(水)
・ 単元目標	
(1)	将来就きたい職業などについて、聞いたり言ったりすることができる。(知識及び技能)
(2)	将来就きたい職業と、その理由などを伝え合うことができる。(思考力、判断力、表現力等)
(3)	他者に配慮しながら、将来の夢について伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 検証授業 I における視点 (P. 4～9 参照) と手立て

視点	視点に対する手立て	
視点1	ア 単元の授業設計の工夫	将来の夢を発表するという言語活動に向けて、児童が見通しをもって主体的に活動に取り組めるように、将来の夢の発表につながる活動を段階的に設定する。
	イ 伝え合う必然性のある場面の設定	単元の導入時に、児童一人一人に将来の夢を伝えたい相手や理由を考えさせることによって、「伝えたい」という思いをもたせる。
視点2	ア 振り返りカードの活用	目標や感想、コミュニケーション5ポイントに関する自己評価によって成長や課題を自覚させるだけでなく、できるようになったことや友達のよかったところを伝え合わせることによって、活動に対する達成感や充実感を味わわせる。
	イ フレンドマップの活用	伝え合う活動でやり取りをした友達の枠にチェックさせることで、人との関わりに対する意欲を高めさせる。また、やり取りをした友達の数が増えていくことを視覚的に捉えさせることによって、満足感を味わわせる。
視点3	ア 方略的能力を高めるための指導の工夫	自分が伝えたい「職業名」の英語表現が分からないときや、相手にうまく伝わらないときに、どうすれば相手に伝えることができるか、教師のモデルを基に方略を考えさせる。また、考えた方略を伝え合う活動で活用させることによって、何とかして自分の考えや気持ちを伝え合おうとする意識を高めさせる。
	イ コミュニケーション5ポイントの活用	伝え合う際に意識してほしいコミュニケーションのポイントを提示し、伝え合う活動の前に確認させることによって、児童が相手の立場に立って伝え合うことができるようにする。

(3) 検証授業Ⅰの指導計画

時	主な学習活動	指導上の留意点等 (○留意点 □視点)
1	<p>1 単元目標を確認する。 伝えたい相手に将来の夢を發表しよう。</p> <p>2 学習計画を立てる。</p> <p>3 職業を表す語句と将来就きたい職業を答える表現を練習する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ポインティングゲーム ・ チャンツ ・ ジェスチャークイズ </p> <p>4 教材に出てこない職業の伝え方を考える。</p> <p>5 学習を振り返る。</p>	<p>□ 将来の夢を伝えたい相手や理由を考えさせ、単元終末の言語活動における目的意識や相手意識をもたせる。 【視点1-イ】</p> <p>□ 単元の見通しをもたせるために、単元終末の言語活動につながる活動を考えさせる。 【視点1-ア】</p> <p>□ 発話する活動では、「教師のモデル」、「教師と児童」、「児童同士」の順で段階的に活動を行い、児童が自信をもって活動に取り組めるようにする。 【視点1-ア】</p> <p>□ 相手が知らない難しい英語表現の職業を相手に伝えるためのモデルを児童に見せ、相手に応じて工夫して伝えることの大切さに気付かせる。 【視点3-ア】</p>
2	<p>将来就きたい職業を尋ねたり答えたりしよう。</p> <p>1 Small Talk</p> <p>2 就きたい職業を尋ねたり答えたりする表現を練習する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ キーワードゲーム ・ チャンツ ・ インタビュービンゴ </p> <p>3 より自然なやり取りの仕方について考え、活用する。</p> <p>4 学習を振り返る。</p>	<p>□ より自然なやり取りにつなげていくために、コミュニケーション5ポイントを基にして、どのような表現やジェスチャー等を加えていけばよいかを考えさせる。 【視点3-イ】</p> <p>○ コミュニケーションを図る場面において、日本語でどんなやり取りをしているかを考えさせてから英語表現につなげていく。</p> <p>□ インタビューをした友達をフレンドマップで確認させ、人との関わり合いに対して達成感や充実感を味わわせる。 【視点2-イ】</p> <p>□ 自己の課題や成長に気付かせたり、コミュニケーションのポイントへの意識化を図ったりするために、振り返りカードで自己評価をさせる。 【視点2-ア】</p>
3	<p>相手を意識して、将来就きたい職業を伝え合おう。</p> <p>1 Small Talk</p> <p>2 将来の夢について伝え合う。</p> <p>3 「Who am I?」クイズをする。</p> <p>4 学習を振り返る。</p>	<p>□ 方略を使って伝え合うことに慣れさせるために、児童にどんな職業かを意図的に尋ねながら Small Talk を行う。 【視点3-ア】</p> <p>○ 将来の夢を伝え合う活動後に、「Who am I?」クイズを設定することによって、意欲をもって伝え合う活動に取り組ませる。</p> <p>□ 相手の立場に立った伝え合いができるようにするために、活動前にコミュニケーションのポイントを確認させる。 【視点3-イ】</p>
4	<p>将来の夢を發表しよう。</p> <p>1 Small Talk</p> <p>2 發表の練習をする。</p> <p>3 将来の夢を發表する。</p> <p>4 学習を振り返る。</p>	<p>○ 児童の不安を軽減したり、前時までの伝え合いの活動とつなげたりするために、ペアでやり取りをする形式で将来の夢を發表させる。</p> <p>□ 達成感や充実感を味わわせるために、単元を通してできるようになったことや友達の頑張りなどを伝え合う活動に取り組ませる。 【視点2-ア】</p>

(4) 検証授業 I の実際

ア 単元の授業設計の工夫【視点 1-ア】

時	学習過程	主な学習活動
1	必要な語句や表現に出会う	<ol style="list-style-type: none"> 単元目標を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">伝えたい相手に将来の夢を発表しよう。</div> 学習計画を立てる。 職業を表す語句と将来就きたい職業を答える表現を練習する。 <ul style="list-style-type: none"> ポインティングゲーム チャンツ ジェスチャークイズ 教材に出てこない職業の伝え方を考える。 学習を振り返る。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>①コミュニケーションの目的の設定・理解</p> </div>
2	音やリズムに慣れる	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">将来就きたい職業を尋ねたり答えたりしよう。</div> <ol style="list-style-type: none"> Small Talk 就きたい職業を尋ねたり答えたりする表現を練習する。 <ul style="list-style-type: none"> キーワードゲーム チャンツ インタビュービンゴ より自然なやり取りの仕方について考え、活用する。 学習を振り返る。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>②目的に応じた発信までの方向性の決定と言語活動等の見通し</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p>《将来の夢の発表に向けて必要な学習》</p> <ul style="list-style-type: none"> 職業名 夢を尋ねる, 答える表現 発表練習 </div> </div>
3	自分のものにする	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">相手を意識して, 将来就きたい職業を伝え合おう。</div> <ol style="list-style-type: none"> Small Talk 将来の夢について伝え合う。 「Who am I?」クイズをする。 学習を振り返る。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>③目的達成のための言語活動</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p>【段階的な活動の取組】</p> <p>《慣れ親しみの順》</p> <p>ポインティングゲーム (聞く)</p> <p>↓</p> <p>チャンツ</p> <p>キーワードゲーム</p> <p>ジェスチャーゲーム (慣れる)</p> <p>↓</p> <p>将来の夢を伝え合う (自分のものにする)</p> <p>↓</p> <p>将来の夢を発表する (言葉を選んで発話する)</p> </div> </div>
4	言葉を選んで発話する	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">将来の夢を発表しよう。</div> <ol style="list-style-type: none"> Small Talk 発表の練習をする。 将来の夢を発表する。 学習を振り返る。
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>④まとめと振り返り</p> </div>

イ 伝え合う必然性のある場面の設定【視点1-イ】

児童に伝え合う必然性をもたせるために、単元の導入で「将来の夢や目標」と「自分の夢の実現を願っている人物」について考えさせ、単元終末の言語活動を「伝えたい相手に将来の夢を発表しよう。」に設定した。将来の夢や目標を伝える目的を明確にし、児童が単元を通して意欲をもって活動に取り組めるように、誰に、何のために将来の夢を発表するのかを考えさせ、伝えたい相手と理由をワークシートに記入させた。図15のように、将来の夢を伝えたい相手が、親や未来の自分、学級の友達など、様々であったため、将来の夢の発表をビデオカメラで撮影し、学級PTAで映像を流したり、タイムカプセルに映像を入れて将来見たりすることができるようにしたりした。

伝えたい相手	親
理由	いつも応援してくれているから。
伝えたい相手	未来の自分
理由	こんな時もあったけど、未来で思い出しにほめるように。

図15 将来の夢を伝えたい相手と理由

ウ 振り返りカードの活用【視点2-ア】

外国語を用いながら考えや気持ちを伝え合うことに対して達成感や充実感を味わわせるために、目標や感想の記述だけでなく、コミュニケーション5ポイントに関する自己評価欄を設け、毎時間自己評価させた(図16)。感想を書かせる際は、英語の語句や表現の習得に関する記述だけでなく、伝え合いに関する振り返りも意識させるようにした。

目標	相手が言ったことに相づちや質問などできるようになった。
感想	相手が言ったことに、私が答えることができた。友達は私の言ったことを聞き取って、答えてくれた。
目標	次からは、助け合ったり視線を大事にして発表したい。
感想	今回はちゃんとジェスチャーを使って質問や表現を出せたので、ほめられたい。

図16 振り返りカードによる自己評価

エ フレンドマップの活用【視点2-イ】

より多くの人との関わりを通して、多様な考えがあることに気付かせるために、一緒に活動をした友達を図17のフレンドマップで確認させた。教師は、毎時間フレンドマップを確認し、積極的に友達のところへ行くことが苦手な児童に対して適切な助言をするようにした。



図17 フレンドマップの活用

オ 方略的能力を高めるための指導の工夫【視点3-ア】

(ア) 教師のモデルを見せる場面

想定されるコミュニケーションがうまくいかない場面の設定 (将来の夢を伝え合う)

《コミュニケーションがうまくいかない原因》

将来の夢は人それぞれであり、話し手の夢である「principal」は教材に出てこないため、「principal」という言葉を知らない聞き手に伝わらない。



【話し手】

I want to be a principal.



【聞き手】

「principal」って何だろう。

方略を活用した教師のモデル（担任と AEA）

《「principal」が何の職業なのかを伝えるための工夫》

知っている語句や既習表現を活用した言い換え、ジェスチャー、その職業に関する場面等、方略を活用して伝える。



I want to be a principal.

【話し手】



「principal」って何だろう。

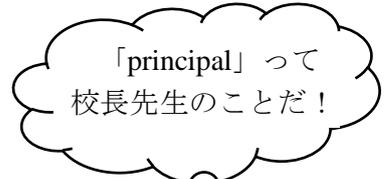


What is principal?

【聞き手】

【方略を活用した発話】

- The principal is a teacher.
- The principal is a school leader.
- The principal helps teachers and students.
- You go to school.
- You can see the principal.
- The principal says “Good morning!”



「principal」って校長先生のことだ！



Thank you! Nice dream!

(イ) 方略を考えさせる場面

相手に将来の夢（職業）を伝える場面における方略



何のヒントで分かった？



School leader!

知っている英語で言い換えたり、ジェスチャーや習った表現を使ったりして職業に関連する場面で伝えられるね。

他にどんな方法で伝えられそう？

その職業に就いている人物名を言えばいい。

《児童と考えた職業を相手に伝えるための方略》

- ①知っている別な英語で言い換える。
- ②ジェスチャーで伝える。
- ③職業に関連する場面を伝える。
- ④職業に関連するものを伝える。
- ⑤職業に就いている人物を伝える。

(ウ) 活用させる場面

活用させる場面の設定

《自信をもって伝えられるようにするための工夫》

個人で自分の将来の夢（職業）の方略を考えさせた後、ペアやグループで助言し合う場を設定し、教師と児童、児童同士の伝え合いに取り組ませる。


➡

➡


【ペアやグループ】
【教師と児童】
【児童同士】

《活用させる場面の児童の様子》

方略を活用した伝え合いの場面では、将来の夢の職業を聞き手により分かりやすく伝えるために、ジェスチャーを使う姿が多く見られた。また、知っている語句を使って、職業から連想できるものやその職業に就いている人物で伝えた。

将来の夢（職業）	伝える際に児童が使用した語句
水族館の飼育スタッフ	Fish staff, many fish keeper, help fish staff
薬剤師	drug store doctor, (服を指しながら)White
幼稚園の先生	small student teacher, Ms.(幼稚園の先生の名前)
助産師	help new baby, baby doctor, help mother and baby

カ コミュニケーション5ポイントの活用 【視点3-イ】

コミュニケーションを円滑に図るために大切にしたいポイントについて児童と共通理解を図り、活動前に確認させることによって意識の向上を図った。毎時間の授業の終わりに五つのポイントについて振り返りカードで自己評価をさせることで、自己の変容を自覚させるとともに、次の学習に生かそうとする意識を高めさせた。また、ポイントを活用することのよさを実感させるために、ポイントを活用したときと活用しなかったときの違いについて考えさせる場面を設定した。児童が記入した目標や感想を見ても、英語の語句や表現の習得に関する記述だけでなく、「確認」や「相づち」、「理由」、「質問」など、コミュニケーションのポイントを意識した感想も見られた（図18）。



・自分から進んで学習することができた。	◎
・友達と協力して、笑顔で楽しく活動することができた。	◎
・習った英語やジェスチャーを使って表現することができた。	○
視線(◎)・はっきりと(◎)・質問(◎)・相づち(○)・助け合い(○)	
目	確認したり相づちをうったり理由をしり
標	言えるようにしよう
感	自分の将来の夢を友だちに伝えられて自分も
想	相手に質問したりすることができた。

図18 コミュニケーション5ポイントの活用場面と自己評価

(5) 検証授業Ⅰ後の考察

ア 検証授業Ⅰ後の調査結果（令和元年7月17日（水）実施 本校第6学年56人対象，質問紙）
検証授業Ⅰ後の実態調査において，事前の実態調査と比較して肯定的な回答の増加が見られた（図19）。

- ・ 「英語を使って，自分の考えや気持ちを伝えたい（活動前の意欲）」（66.6%→89.2%）
- ・ 「学習した英語を使って，自分の考えや気持ちを伝えようとしている（活動中の積極性）」（61.0%→82.2%）

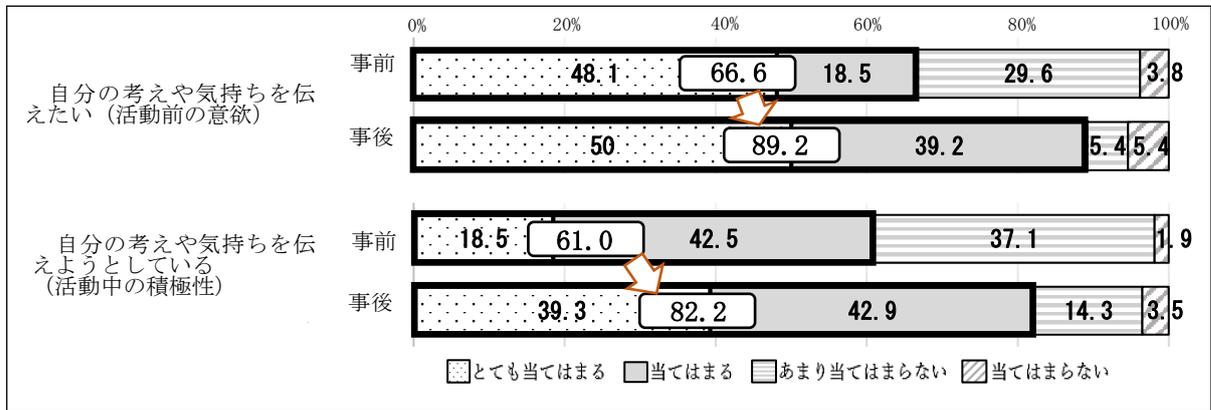


図19 検証授業Ⅰ事前事後の意識調査比

イ 検証授業Ⅰにおける成果と課題

	成果	課題
視点1	○ 単元終末の言語活動を導入段階で児童と共通理解を図ることで，伝え合う活動に対する意欲を高められた。	○ 更に自信をもって主体的に活動に取り組めるように，間違いや失敗を恐れず，互いに助け合える雰囲気づくりの工夫が必要である。
視点2	○ 伝え合いに関する振り返りを意識させることで，コミュニケーションのポイントを生かして伝え合うことができたという達成感を味わわせることができた。	○ 1時間ごとの成長や課題だけでなく，単元全体を通した自らの成長や課題を自覚させるための振り返りの工夫が必要である。
視点3	○ 相手にうまく伝えるための視点を明確にし，活用させたことで，何とかして相手に考えや気持ちを伝えようとする積極性が高まった。	○ 自信をもって自分の考えや気持ちを伝えられるように，伝える内容を構築させるための手立てが必要である。

ウ 検証授業Ⅱに向けての改善

視点1の課題より	児童が自分の考えや気持ちを伝えやすい雰囲気づくりをし，更に自信をもって主体的に活動に取り組めるようにするために，外国語活動における学習で大切にしたい考えを掲示し，授業の始めややり取りをする活動の前に確認させる。
視点2の課題より	「振り返りカード」に単元全体を通した自己の成長や課題，伝え合いに関する振り返りの欄を設けたり，互いの頑張りや成長などを伝え合う場を設けたりすることで，児童に達成感や充実感を味わわせる。
視点3の課題より	「Small Talk」の工夫によって，伝える内容を構築させ，児童が自信をもって自分の考えや気持ちを伝えられるようにする。

5 検証授業Ⅱの実際と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要

<ul style="list-style-type: none"> ・ 単元名 I like my town. 自分たちの町・地域 (We Can! 2 Unit4) ・ 実施学年 鹿児島市立西伊敷小学校第6学年 児童56人 ・ 実施時期 令和元年11月11日(月)～11月27日(水) ・ 単元目標
<p>(1) 地域にどのような施設があるのか、また欲しいのか、更に地域のよさなどを聞いたり言ったりすることができる。(知識及び技能)</p> <p>(2) 地域のよさや課題などについて自分の考えや気持ちを伝え合ったり、地域のよさや願いについて例を参考に語順を意識しながら書いたりする。(思考力、判断力、表現力等)</p> <p>(3) 他者に配慮しながら、地域のよさなどについて、伝え合おうとする。 (学びに向かう力、人間性等)</p>

(2) 検証授業Ⅱにおける視点 (P. 4～9参照) と手立て

視点	視点に対する手立て	
視点1	イ 伝え合う必然性のある場面の設定	単元の導入時にALTからのビデオメッセージを視聴させることによって、地域のことを伝える目的や相手を明確にし、意欲の向上を図る。
	ウ Good English5ポイントの活用	外国語の学習における約束を提示し、毎時間声に出して確認させることによって、間違いや失敗を恐れず、協力し合いながら積極的に活動に取り組みさせる。
視点2	ア 振り返りカードの活用	単元を通した自己の成長や課題だけでなく、友達の見解で参考になったところや伝え合いに関する振り返りを記述させ、互いのよさや頑張りを伝え合う活動に取り組みさせることによって、達成感や充実感を味わわせる。
視点3	ア 方略的能力を高めるための指導の工夫	自分が伝えたい「施設名」の英語表現が分からないときや、相手にうまく伝わらないときに、どうすれば相手に伝えることができるか、教師のモデルを基に視点を考えさせる。また、視点を基にして、活用させる場面を繰り返し設定することによって、何とかして自分の考えや気持ちを伝え合おうとする意識を高めさせていく。
	ウ Small Talkの工夫	児童に適切な表現を身に付けさせるための視点(MERRIER Approach)を用いて児童とやり取りをすることによって、伝える内容を構築させたり、どのように英語を使えばよいのかを理解させたりする。また、始めに教師同士のやり取りのモデルを見せることによって、自信をもって教師とやり取りができるようにする。

(3) 検証授業Ⅱの指導計画

時	主な学習活動	指導上の留意点等 (○留意点 □視点)
1	1 単元目標を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">ALTに西伊敷のことを伝えよう。</div> 2 GE5ポイントを確認する。 3 西伊敷にある施設を確認する。 4 ALTに紹介したい施設をワークシートに書く。 5 学習を振り返る。	□ ALTのビデオメッセージを視聴させ、単元終末の言語活動において、伝える相手や目的を明確にする。 【視点1-イ】 □ AEAが知っている西伊敷の施設を、施設名ではなく、方略を用いて児童に伝える。 【視点3-ア】 ○ ALTに伝えることを意識させ、どのような施設を伝える必要があるか考えながら書かせる。

2	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">地域にある施設, ない施設を伝える表現を練習しよう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 GE 5ポイントを確認する。 2 施設の言い方を練習する。 3 ある施設, ない施設を伝える表現を練習する。 4 学習を振り返る。 	<p><input type="checkbox"/> 児童の学習に対する意欲や学級の雰囲気高めさせるために, GE 5ポイントを声に出して確認させる。 【視点1-U】</p> <p><input type="checkbox"/> 伝え合う必然性をもたせるために, インタビューをして, 互いの地図を当てるというインフォメーション・ギャップのある活動に取り組ませる。</p> <p><input type="checkbox"/> 達成感や充実感を味わわせたり, 課題意識をもたせたりするために, 振り返りカードを使って学習を振り返らせる。 【視点2-A】</p>
3	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">ALTに伝えることを意識して, 西伊敷にある施設を伝え合おう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Small Talk 2 固有名詞(店名)だけでは伝わらない施設の伝え方を考える。 3 西伊敷にある施設を伝え合う。 4 学習を振り返る。 	<p><input type="checkbox"/> We have/don't have~. の既習表現や対話をつなぐ表現に慣れ親しませるために, 教師のモデルを見せた後, 繰り返し児童とやり取りをする。 【視点1-A】</p> <p><input type="checkbox"/> モデルスキットを見せることで, 店名だけではALTに伝わらないことに気付かせ, どうすればALTに伝わるか考えさせる。 【視点3-A】</p> <p><input type="checkbox"/> ALTに伝えることを意識させるために, 友達が伝えようとしている施設名に対して, 聞き手は“What is (施設名)?”と尋ね返すように指示する。 【視点3-A】</p>
4	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">好きな施設とその理由を伝え合う表現を練習しよう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Small Talk 2 モデルスキット 3 表現を練習する。 聞く→慣れる→伝え合う 4 学習を振り返る。 	<p><input type="checkbox"/> GE 5ポイントを全員で確認し, 外国語を使ったやり取りに安心して取り組める雰囲気を高める。 【視点1-U】</p> <p><input type="checkbox"/> 既習表現や対話を続ける表現だけでなく, “What is (施設名)?”と尋ねることによって, 相手に何とかして伝える表現にも慣れ親しませる。 【視点3-A】</p> <p><input type="checkbox"/> コミュニケーションのポイントを意識しながら活動に取り組めるように, 活動前にコミュニケーション5ポイントを確認させる。 【視点3-I】</p>
5	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">西伊敷にある好きな施設とその理由を伝え合おう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Small Talk 2 モデルスキット 3 好きな施設と理由を伝え合う。 4 学習を振り返る。 	<p><input type="checkbox"/> モデルスキットを見せることによって, 本時で学習する表現に気付かせ, 見通しをもって活動に取り組めるようにする。</p> <p><input type="checkbox"/> Small Talk で繰り返し児童とやり取りをすることによって, 伝える内容を確認し, 好きな施設とその理由を伝える表現に慣れ親しませる。 【視点3-U】</p> <p><input type="checkbox"/> 本時でやり取りをした友達をフレンドマップで確認させることによって, やり取りに対する満足感を味わわせるとともに, 次時以降の課題にも気付かせる。 【視点2-I】</p>

6	<p>西伊敷にあったらいいなと思う施設とその理由を伝え合おう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Small Talk 2 モデルスキット 3 表現を練習する。 聞く→慣れる→伝え合う 4 学習を振り返る。 	<p>□ A L Tの質問に対応することができるように、Small Talkの中で児童の発話に対して様々な質問をして返答に慣れさせる。 【視点3-ウ】</p> <p>○ 児童が自信をもって伝え合う活動に取り組めるように、伝え合う活動の前に聞く活動や慣れる活動に取り組ませる。</p> <p>○ 伝え合う活動後に「Who am I?」クイズをすることを予告し、意欲的に活動に取り組むことができるようにする。</p> <p>□ より多くの友達とやり取りをする意識を高めるために、伝え合う活動の前に、フレンドマップを確認させる。 【視点2-イ】</p>
7	<p>A L Tに伝える内容を整理して、伝える練習をしよう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 GE 5ポイントを確認する。 2 発表内容を確認する。 3 Small Talk 4 練習する。 5 学習を振り返る。 	<p>○ A L Tに伝える内容を整理させるために、これまでの学習を振り返らせる。</p> <p>□ 相手の立場に立って伝え合う活動に取り組ませるために、発話に対する反応や対話を続けるための表現を使いながらSmall Talkを行う。 【視点3-ウ】</p> <p>○ より分かりやすくA L Tに伝えられるように、A L Tに伝えるための練習では、グループ同士で互いの発表を見せ合って助言させたり、分かりやすく伝えられている児童を全体で紹介したりする。</p>
8 ・ 9	<p>A L Tに西伊敷のことを伝えよう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 A L Tとあいさつをする。 2 伝える内容を確認する。 3 A L Tに伝える。 4 単元を振り返る。 	<p>○ A L Tに伝えるだけでなく、A E Aや担任にも伝えさせたり、グループで練習に取り組ませたりすることで、発話する場面を多く設ける。</p> <p>□ 単元を通した自己の成長や課題だけでなく、友達の意見で参考になったところや伝え合いに関する振り返りをさせることによって、より達成感や充実感を味わわせる。 【視点2-ア】</p>

(4) 検証授業Ⅱの実際

ア 伝え合う必然性のある場面の設定【視点1-イ】

<p>《ビデオメッセージの主な内容》</p> <ol style="list-style-type: none"> ① A L Tの自己紹介 <ul style="list-style-type: none"> ・ 名前, 出身国, 家族構成等 ② 鹿児島について <ul style="list-style-type: none"> ・ 鹿児島に住み始めて2か月 ・ 城山, 桜島, 水族館, 南洲公園, 仙巖園は知っている ③ 西伊敷について <ul style="list-style-type: none"> ・ 行ったことがない ・ 西伊敷に行く予定なので, 町のことを教えてほしい 	
---	--

図20 ビデオメッセージの視聴とメッセージ内容

単元の導入で、初めて西伊敷を訪れるALTのビデオメッセージを児童に視聴させ、単元終末の言語活動を「ALTに西伊敷のことを伝えよう。」と設定した(図20)。ALTに伝える場を設定することで、英語で伝えるという必然性や学習したことを生かして伝えようという意欲を児童にもたせることができた(図

エイドリアン先生にうまくつたえられてよろこんでもらえるかほかからないけれど、えいけんめいがかんぱりたいたいと思います。

エイドリアン先生に、~~えいけんめい~~西伊敷のことを伝えらぬるようにかんぱりたいたいです。

西伊敷にあるしせつでも知らないところかあって、びっくりします。

図21 第1時の児童の感想

21)。また、自分たちの住む町について紹介させることで、自分たちの住む町のよさを改めて感じさせたり、新たな発見につなげさせたりすることもねらいとした。

イ Good English 5 ポイントの活用【視点1-ウ】

単元の導入で、外国語の学習の時間における五つのポイントについて児童と共通理解を図った(写真1)。間違いや失敗を恐れずに安心して活動できる環境の中で、児童が自信をもって、積極的に英語を使ったやり取りをすることができるように、毎時間の導入だけでなく、活動前にも確認させた。また、活動中に五つのポイントに関する児童のよい姿が見られたときは、その都度全体の場で称賛し、更に学級全体に定着するように工夫した。

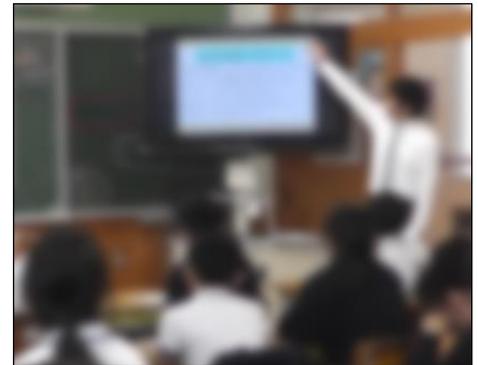


写真1 Good English 5 ポイントの確認

ウ 振り返りカードの活用【視点2-ア】

単元全体を振り返り、単元を通して成長や課題を一人一人がより自覚し、達成感や充実感を味わうことができるようにするために、図22の振り返りカードに記述させ、互いのよさや頑張りを伝え合う活動に取り組みました。

《単元全体の振り返り》	
分かったこと、できるようになったこと、成長したと感ずること	前よりは少しは、きりと語せたんひやないかなと思っました。
友達の意見で参考になったこと、学び合っよかったこと	友達に、分らないことを聞いたし、教えたししたので、おたかへに長く西伊敷のことなどを伝えられたと思う。
英語で考えや気持ちをやり取りする活動を通して感ずたこと	最初は、「いやだ」と思っていたけど、だんだん言えるようになったら、楽しくても、英語のことを知りたいたいと思っ。
今後の学習でもっとできるようになりたいこと	たくさんの単語を覚えて、その単語で、分かりやすく伝えられたらいいと思っ。

図22 振り返りカード(単元全体の振り返り)

エ 方略的能力を高めるための指導の工夫【視点3-ア】

(ア) 教師のモデルを見せる場面

想定されるコミュニケーションがうまくいかない場面の設定(町の施設を伝え合う)

《コミュニケーションがうまくいかない原因》

伝える相手は、自分たちの町のことを知らないALTのため、日本語の店名を言われても何の施設なのか聞き手であるALTは分からない。

【話し手】 We have 「西伊敷温泉」.

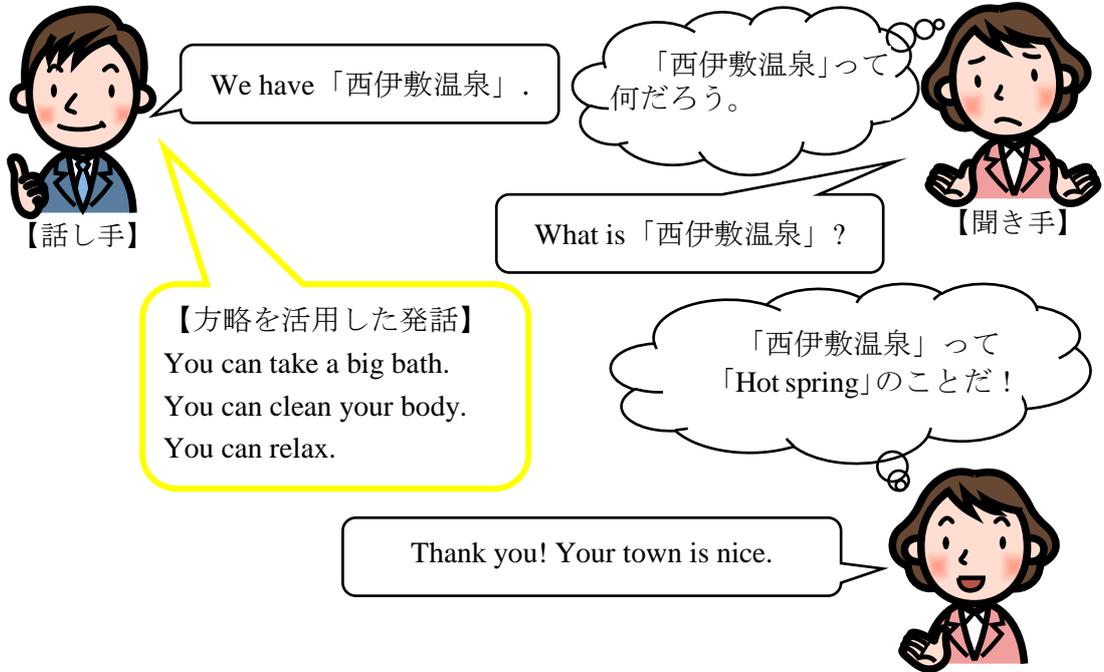
「西伊敷温泉」って何だろう?

【聞き手】

方略を活用した教師のモデル（担任と AEA）

《「西伊敷温泉」がどんな施設なのかを伝えるための工夫》

「Hot spring（温泉）」は教材に出てこない語句のため、知っている語句や既習表現を活用した言い換え、ジェスチャー、その施設に関する場面など、方略を活用して伝える。



(イ) 方略を考えさせる場面

地域にある施設を伝える場面における方略

《多くの視点を考えさせるための工夫》

いくつかの施設を例題として出題し、店名で伝わらないときに、どのようにして相手に伝えるか考えさせる。

“What is 「西伊敷温泉」?”とALTに聞かれたら、どうやって伝えますか。



《児童の考え》

- Hot water.
- Hot pool.
- Clean body.
- 洗っている場面をジェスチャーで伝える。
- サウナ
- Hot spring.

《児童と考えたALTに施設を伝えるための方略》

- | | |
|-------------------|----------------|
| ①知っている別な英語で言い換える。 | ②ジェスチャーで伝える。 |
| ③施設に関連する場面を伝える。 | ④施設でできることを伝える。 |
| ⑤店名だけではなく施設名で伝える。 | ⑥施設にあるものを伝える。 |

(ウ) 活用させる場面

活用させる場面の設定

《ALTに方略を活用して伝える場の設定の工夫》

方略を活用することで、自分の考えや気持ちが伝わったという達成感や充実感を味わわせるために、実際にALTに方略を活用して伝える場を意図的に設定した。児童が伝えるいくつかの施設の一つに対してALTが“What is(施設)?”と児童に尋ねるようにすることで、児童の負担や機械的なやり取りにならないようにした。

【ALTに伝える場面の児童の様子について】

検証授業Ⅰでは、ジェスチャーや知っている語句のみの羅列によって将来の夢(職業)を伝える児童が多かったが、検証授業Ⅱでは、図23の感想のように、相手が分かるように工夫して伝えようとする意識の高まりが見られ、ジェスチャーや知っている語句だけでなく既習表現も活用しながら町にある施設等をALTに伝えていた。

伝える施設(仮名)	ALTに伝える際に児童が使用した表現
おおさき文具 【文具店】	<ul style="list-style-type: none"> We can buy pencils, sketch books, erasers.
ヒマワリ 【ドラッグストアー】	<ul style="list-style-type: none"> I can buy frozen foods. It's a drug store.
はなぶさ 【ケーキ屋】	<ul style="list-style-type: none"> It's a cake shop. You can buy cheese cakes and strawberry daifukus.
野田屋 【パン屋】	<ul style="list-style-type: none"> You can see a baker. You can buy many breads.

ホットスプリングという言葉を知らなかったけど友達から「ヒマワリバス」と言っていて、私もわかるまでは、使っていたと思った。

図23 方略の活用に関する児童の感想例

オ Small Talkの工夫

教師とのやり取りを通して、考えや気持ちを伝えるために必要な語句や表現を身に付けられるように、MERRIER Approachの七つのテクニックを活用しながらSmall Talkを行った。小学校段階においては、間違った表現や不完全な表現を使う児童が多いことが予想されるため、図24のように「Expansion」を特に意識して児童とのやり取りを行った。

その際、児童が発話に対して抵抗をもたないように、間違いや不完全な表現を指摘するのではなく、さりげなく正しい言い方に修正しながら話を展開していくようにした。

児童が方略を使って施設を伝える場面の一部

(T:教師, S:児童)

Interaction: 児童とのやり取り

T: What is 「ラウンドワン」?

S1: Enjoy bowling.

Reward: 児童への称賛

T: Oh, (S1の名前). Good!
(ジェスチャーをしながら) Enjoy bowling.

Mime: 言語外情報

I can enjoy bowling.

Thank you.

Expansion: 発話の修正

T: Another hint please.

S2: I can enjoy games and sports.

※ S1と教師とのやり取りを受けて、S2は、「I can」を使って伝えることができた。

図24 MERRIER Approachの視点を活用したSmall Talkの場面

(5) 検証授業Ⅱ後の考察

図25は検証授業Ⅱ前後に行った意識調査の結果を比較したものである。各視点の考察については、次のとおりである。

ア 【視点1】 自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための工夫

間違いや失敗を気にすることなく英語で伝え合う雰囲気が高まった一方で、「自信をもって外国語活動の学習に取り組むことができる。」の項目における肯定的な回答が、3.3ポイント減少していた。児童にとってALTに英語で伝えるという場面設定が初めてであったため、自分の英語が伝わるのかどうかという不安を感じていたことが要因として考えられる。

イ 【視点2】 達成感や充実感を味わわせるための工夫

学習を通して、達成感や充実感を味わうことができている児童が、19.2ポイント増加した一方で、自分の成長を自覚できたという児童の割合は1.8ポイント減少していた。単元の振り返りの際に、単元前と単元後の具体的な変化を自己評価する児童自身の基準が厳しくなったことが要因として考えられる。

ウ 【視点3】 相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための工夫

相手意識をもって伝えたり、聞いたりする項目において、肯定的な回答がいずれも20ポイント以上増加した。コミュニケーションを図る上でのポイントや伝え合うための方略を具体的に示し、活用させたことによって、機械的なやり取りではなく「伝えたい」、「知りたい」という思いをもって、相手を意識しながらコミュニケーションを図ることができるようになってきたと考えられる。

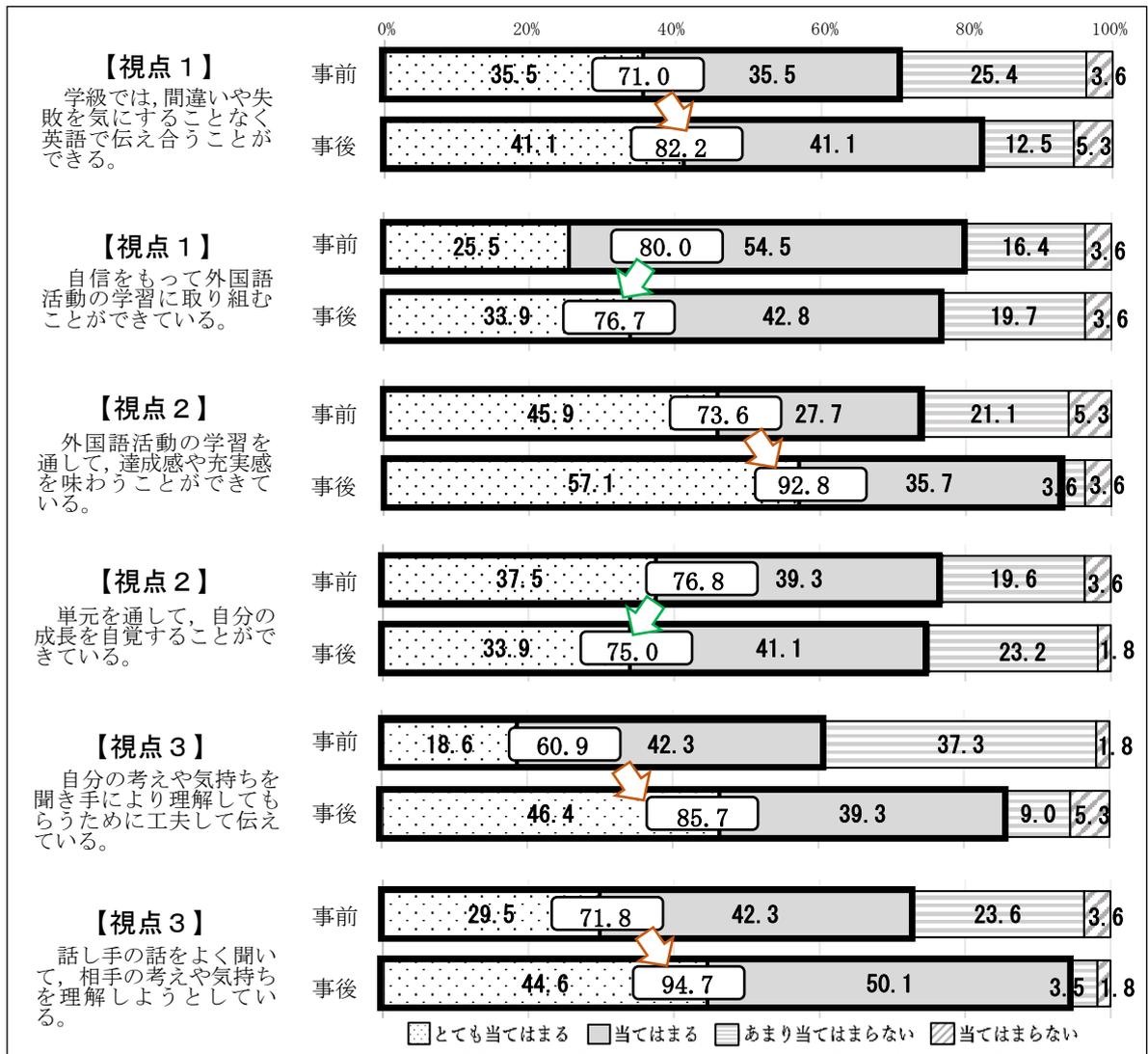


図25 検証授業Ⅱ事前事後の意識調査の比較

IV 研究のまとめ

本研究では、小学校外国語教育において、児童が自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための手立ての在り方を明らかにし、児童に達成感や充実感を味わわせながら、児童が外国語を話したくなる学習指導の工夫について研究を進めてきた。これによって、児童のコミュニケーションに対する意欲や、既存の知識や表現を活用しながら自分の考えや気持ちを伝え合おうとする意識を高めることができた。また、図 26 の児童の感想から、外国語で自分の考えや気持ちを伝えることができることによって達成感や充実感を味わい、外国語を用いたコミュニケーションを楽しむことができるようになることが分かった。

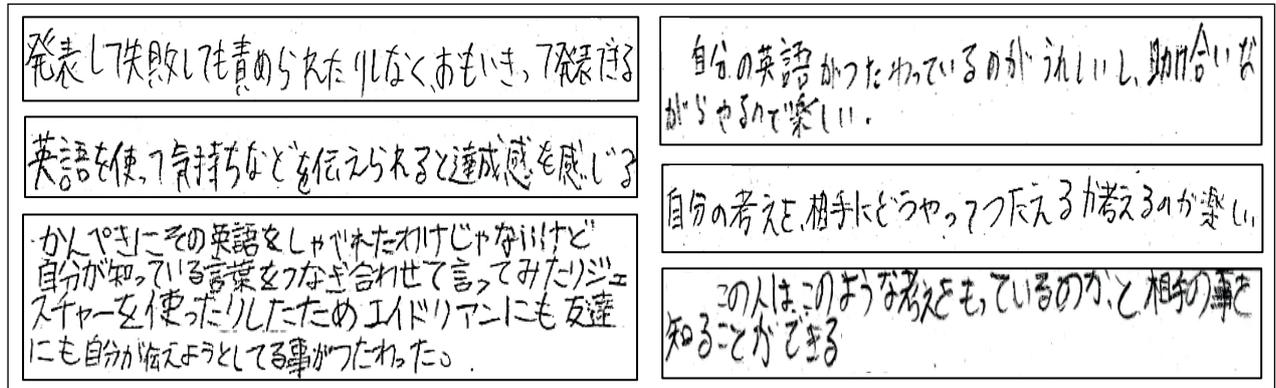


図 26 検証授業後の児童の感想

1 研究の成果

- (1) 【視点 1】 自信をもって主体的にコミュニケーションを図るための工夫について
 - ・ 児童にとって伝え合う必然性のある場面を設定することによって、「伝えたい」、「知りたい」という意欲を高めさせることができた。
 - ・ 外国語の学習の時間におけるルールを児童と共通理解することによって、児童は互いの考えや気持ちを認め合いながら、協働的にやり取りをする雰囲気が高まり、間違いや失敗を気にすることなく外国語で伝え合うことができるようになってきた。
- (2) 【視点 2】 達成感や充実感を味わわせるための工夫について
 - ・ フレンドマップの活用によって、普段あまり交流のない友達とも考えや気持ちを伝え合うことができた。様々な友達とのやり取りを繰り返す中で、自分の考えや気持ちをより分かりやすく伝えられるようになり、達成感や充実感につながった。
 - ・ 振り返りの中で友達の頑張りや成長について気付いたことを互いに伝えさせることによって、活動に対する自己肯定感を高めさせることができた。
- (3) 【視点 3】 相手の立場に立って考えや気持ちを伝え合うための工夫について
 - ・ 聞き手にうまく伝わらない場面を意図的に設定し、方略やコミュニケーションのポイントを活用させる中で、聞き手により分かりやすく伝えるという意識を高めさせることができた。
 - ・ 「助け合い」のポイントを示すことによって、コミュニケーションにおける聞き手の重要性を意識させることができ、話し手の発話を注意深く聞こうとする姿が見られるようになった。

2 今後の課題

- (1) 児童が興味・関心のある話題や身近な題材を言語活動として設定し、外国語で伝え合うことができたという達成感や充実感を繰り返し味わわせることによって、更に自信をもたせていく必要がある。
- (2) 児童により明確な目標をもたせながら活動に取り組みせたり振り返らせたりすることによって、児童が自己の成長を具体的に捉えられるようにする必要がある。
- (3) 自分の考えや気持ちを伝えるための表現や方略を発達の段階に応じて活用できるように、継続的に活用させるための手立てを考えていく必要がある。

引用・参考文献

〈引用文献〉

- 1) 文部科学省 『生徒指導提要』 2010年 教育図書
- 2) 長瀬荘一 著 『英語授業改革双書 No.8 コミュニケーション能力を
育てる英語の授業改造』 1994年 明治図書
- 3) 片岡徳雄 著 『個を生かす集団づくり』 1976年 黎明書房
- 4) 松川禮子, 大城賢 編著
『小学校外国語活動実践マニュアル』 2008年 旺文社
- 5) 泉恵美子 著 『小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導』
2017年 京都教育大学教育実践研究紀要 第17号
- 6) 渡邊時夫 監修, 酒井英樹, 塩川春彦, 浦野研 著
『英語が使える日本人の育成—MERRIER Approachのすすめ—』 2003年 三省堂

〈参考文献〉

- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編』 2017年 開隆堂
- 北出亮 著 『英語のコミュニケーション活動』 1987年 大修館書店
- 金森強 著 『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』 2003年 教育出版
- 三浦孝, 中嶋洋一, 池岡慎 編著
『ヒューマンな英語授業がしたい!—かかわる, つながる
コミュニケーション活動をデザインする』 2006年 研究社
- サンドラ・サヴィニョン (Sandra Savignon) 著
『コミュニケーション能力—理論と実践—【原書第2版】』 2009年 法政大学出版局
- 岡秀夫, 金森強 編著
『小学校英語教育の進め方—「ことばの教育」として—【改訂版】』 2009年 成美堂
- 酒井英樹 著 『小学校の外国語活動の基本の「き」』 2014年 大修館書店
- 直山木綿子 著 『小学校外国語活動のツボ』 2014年 教育出版
- 安河内勇一 著 『コミュニケーションの楽しさを味わう児童を育てる
外国語活動の指導 「段階的なコミュニケーション活動」
を展開するための工夫を通して』 2015年 ふくおか教育論文
- 大城賢 著 『平成29年版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理外国語』 2017年 東洋館出版社

長期研修者 [田代 祐二]

担当所員 [真正 基道]

【研究の概要】

本研究は、児童が外国語を話したくなる学習指導を工夫することによって、外国語を用いながらコミュニケーションを図ることを楽しむ児童の育成を目指した研究である。

外国語を用いながらコミュニケーションを図ることを楽しむ児童を育成するためには、児童が「伝えたい」、「知りたい」という思いをもち、相手の立場に立って主体的に考えや気持ちを伝え合うことによって、達成感や充実感を味わわせることが重要である。

本研究を通して、外国語を用いてコミュニケーションを図ることへの自信が生まれ、「誰に」、「何のために」という相手意識や目的意識をもって、主体的に考えや気持ちを伝えようとする児童の姿が見られた。

【担当所員の所見】

令和2年度から全面実施される小学校外国語活動、外国語に向け、それらを担当する先生方の少しでも手助けになる研究にすという志から始まった研究であった。

研究が始まった当初は基本的な外国語活動、外国語の授業づくりの在り方が研究の中心であったが、その後、児童が外国語を使ってコミュニケーションを楽しむために必要な内容を追究した。

小学校で外国語活動や外国語が実施されることになった目的は中学校外国語の前倒しではなく、児童が中学校で外国語を学ぶ前に外国語を使うという経験を小学校で体験することである。

しかし、小学生が外国語を使ってコミュニケーションを楽しんだり、外国語を使う経験をしたりするには、使える語彙が少ないという大きな課題があった。

それでも、コミュニケーション本来の意味や児童の言語習得のプロセス、児童が人間関係を構築するための研究を行い、検証を行ったことで、児童が外国語を使い、楽しくコミュニケーションするための授業づくりの示唆ともなる研究になった。

今後は研究内容を多くの先生方に広めることも視野に入れ、更に研究内容を追究していかれることを期待したい。